第５回 宗門教学会議 開催報告（前半）

理想の念仏者像を求めて

―日本社会で求められる僧侶像・寺院像―

※第５回宗門教学会議委員

釈 徹宗（しゃく てっしゅう）氏
相愛大学教授

前田純代（まえだ すみよ）氏
元野村総合研究所コンサルタント
安芸教区善法寺坊守

三田真史（みた まさふみ）氏
京都新聞社編集局文化部長・論説委員

徳永一道（とくなが いちどう）氏
勧学寮頭

※座長

丘山願海（おかやま がんかい）
浄土真宗本願寺派総合研究所長

※司会

藤丸智雄（ふじまる ちゆう）
浄土真宗本願寺派総合研究所・副所長

満井秀城（みつい しゅうじょう）
浄土真宗本願寺派総合研究所・副所長

二〇一七年二月一日、第五回宗門教学会議が開催されました。今回のテーマは、「理想の念仏者像を求めて――日本社会で求められる僧侶像・寺院像――」です。

先般、僧侶育成体系プロジェクト委員会より答申書「一〇年、二〇年後の日本社会で求められる僧侶像・寺院像　答申書」（『宗報』二〇一六年一一・一二月合併号掲載）が提出されました。宗門教学会議では、委員会で提案された「僧侶像・寺院像」を受け、宗門の理想的な念仏者のあり方や、そうした人材をどのように養成していくのかについて、以下の六つのテーマを設定して具体的な議論を行いました。

①人のために生き、人と共に生きる「一緒性」
②信頼される僧侶・選ばれる寺院とは
③法話力とは
④講師の資質について
⑤坊守の力を活かすために
⑥誰もが学びを深めるために

ご門主さまご臨席のもと、第五回宗門教学会議委員として相愛大学教授の釈徹宗氏、元野村総合研究所コンサルタントで安芸教区善法寺坊守の前田純代氏、京都新聞社編集局文化部長・論説委員の三田真史氏、勧学寮頭の徳永一道氏を招いて行われた当日前半の様子について、今号ではご報告します。尚、当日の司会は、本願寺派総合研究所副所長の藤丸智雄が務めました。

宗報17-05読物.qxp_宗報 2017/06/26 13:43 ページ 22

「宗門教学会議」総長あいさつ

本日はようこそ宗門教学会議へご参集くださいました。

宗門教学会議は、宗門が当面する諸問題、宗門内外から提起される現代的課題及び種々の問題等について、先端的知見を有する有識者から、動向の把握分析と提言をいただき、「宗教者が持つ知見が現代社会においてどのような位置にあり、より良い社会の創造のためにいかなる役割を果たしうるか」、宗門の活動の方向性を考えてゆく重要な会議として位置付けられております。

さて、本日のテーマは、「理想の念仏者像を求めて――日本社会で求められる僧侶像・寺院像――」です。二〇一五年に策定されました「宗門総合振興計画」の中に、宗門を構成するあらゆる者が念仏者としての本分を励行することで、宗門の輪を社会全体に広げていくということが目標として掲げられ、その目標に向けて「僧侶育成体系プロジェクト委員会」が設置され、全一四回の会議を開催し、委員の諸先生方には、僧侶を育成するための方策について、実に熱心に議論をお進めいただいてまいりました。その成果として、『宗報』（二〇一六年一一・一二月合併号）において、「一〇年、二〇年後の日本社会で求められる僧侶像・寺院像　答申書」が掲載されるに至りましたことは、皆さまご存じの通りです。

ご門主さまは「法統継承に際しての消息」において「寺院にご縁のない方々に対して、いかにはたらきかけていくのかを考えることも重要です。本願念仏のご法義は、時代や社会が変化しても変わることはありませんが、ご法義の伝え方は、その変化につれて変わっていかねばならないでしょう」とお示しになられました。

「答申」の中では、この時代の変化について分析が加えられ、現代における僧侶像・寺院像についての可能性が示され、僧侶も寺院も「選ばれる」時代になったと提言されております。

この「答申」は、「僧侶をいかに育成していくべきか」、宗門からの問いかけに対して、一つのご返答をいただいたものであります。「答申」にとどまってしまえば、何の改革にもなりません。「答申」の内容について、様々な立場の方々、人材育成に関わる多くの方々にご議論いただき、具体的な施策へと進めていかねばなりません。この宗門教学会議は、その第一歩となるものであります。

本来人材育成は、組織の中核となる重要な課題でありますが、これまで宗派の中で、人材育成について総合的、専門的に議論を行い、専門家を育成するにはいたっておりません。かつて、私が得度（とくど）をして僧侶になった時分は、近隣のご門徒さんにより、念仏を喜び念仏とともに生活を歩むものとして育てられたことが思い出されます。いまもこうしたお育てを

宗報17-05読物.qxp_宗報 2017/06/26 13:43 ページ 23

いただいている僧侶も多くおられますが、社会構造の大きく変化した現代社会においては、宗門が直接的に人材育成を図っていく必要があることもまた事実です。

念仏者を育てる、人材を育てる、僧侶を育てることの重要性を、この会議を通して宗門全体に発信し、僧侶の機運を高めていきたいと考えております。

お忙しい中、ご参集いただきました釈徹宗先生、前田純代先生、三田真史先生、さらに徳永一道勧学寮頭におかれましては、深く感謝申しあげますとともに、本会議の重要性をご理解たまわり、宗門の新たな未来をひらくために、お知恵をお貸しくださいますよう、何とぞお願い申しあげます。

テーマ①

人のために生き、人と共に生きる「一緒性」

（司会・藤丸） 今日の会議では、「答申」の内容にしたがって六つのテーマを設定しました。

「答申」では、「寺院像・僧侶像の検討」（一四頁）という項目の中で、「一緒性」という言葉が使用されています。「一緒性」は「答申」全体に関わる一貫した基本理念とされていますから、まずは「一緒性」という言葉の意味や課題について議論を始めたいと思います。では、答申の策定に関わった座長の丘山から説明をお願いします。

御同朋・御同行と大乗仏教の精神

（丘山） 今回、僧侶育成体系プロジェクトの委員の一人として私も「答申」の作成に携わりました。

「一緒性」という用語は、今回新たに作った造語です。真宗ではこれまで、「御同朋」「御同行」という言葉で、念仏者の基本的な姿勢を示してきましたが、「一緒性」はその精神を受け継いで、さらに「大乗仏教の精神」を表したところに特徴があります。

言うまでもなく、浄土真宗は「大乗仏教」の流れをくんでいます。「大乗仏教」では「慈悲」や「利他性」を重視します。これを現代風にいえば、「人のために生き、人と共に生きる」ということです。「一緒性」という用語は、それを端的に示したものです。人間関係の希薄化が進む社会において、新たな絆や相互の繋がりを回復させる意味として、あるい

宗報17-05読物.qxp_宗報 2017/06/26 13:43 ページ 24

は国内外に顕在化する社会問題と僧侶や寺院が隔絶しないことを含意する言葉として、「一緒性」は大切な意味を含んでいると考えています。

「わかりやすさ」の必要性

（三田） 私は新聞社に勤めていますが、できる限り専門用語を使わず、誰にでも「わかる言葉」で様々な情報を伝えることが私の仕事です。その立場からいえば、「理念」というのは「わかりやすい」必要があります。そうしないと一般の人たちには伝わりません。もちろん「御同朋」「御同行」という伝統的な言葉も大切ですが、宗門外部の方をはじめ、ご門徒であっても今は少々わかりにくい。寺院や僧侶の一〇年後、二〇年後の未来を見据えるのであれば、「わかりやすさ」は絶対不可欠な条件だろうと考えます。

「寺院像・僧侶像」を考える契機をもたらすために

（釈） 座長と同じく、私も「答申」作成に携わった委員の一人です。

「答申」は「諮問に対する意見・提言」ですから、誰もが納得する内容ばかりでないのは承知しています。ただ、宗門内外で議論を誘発して一人ひとりが「寺院像・僧侶像」を考える契機をもたらすためにも、あえて「一緒性」という新たな言葉を提示することに反対しませんでした。「御同朋・御同行」に限らず、「専門用語」は言葉自体が持つ豊かで動的な要素が次第に失われ、固定的で限定的な意味に落ち着いてしまうことがあります。そこで、専門用語を別の言葉で言い換え

釈 徹宗氏

一九六一年生まれ。龍谷大学文学部仏教学科卒業。一九九八年、大阪府立大学大学院人間文化研究科博士課程比較文化専攻修了。現在、相愛大学人文学部教授、大阪教区豊島北組・如来寺住職、特定非営利活動法人リライフ代表。宗派では僧侶育成体系プロジェクト委員会委員を務める。専門は宗教学。

【著作】

『宗教は人を救えるのか』（角川ＳＳＣ新書、二〇一四年）
『死では終わらない物語について書こうと思う』（文藝春秋、二〇一五年）
『歎異抄（一〇〇分 de 名著）』（ＮＨＫ出版、二〇一六年三月）など

宗報17-05読物.qxp_宗報 2017/06/26 13:43 ページ 25

ることで、むしろかつての言葉が輝きを取り戻し、再活性化することも起こる。「一緒性」という言葉には、そうした効果が期待されているのです。

大乗の精神そのもの

（徳永）「一緒性」とはまさしく「大乗の精神」そのものでしょう。親鸞聖人は浄土真宗を「大乗のなかの至極なり」と示されていますね。にもかかわらず、過去の宗門では「安心はおのれ一人のしのぎの問題」ということに集約しすぎたきらいがあります。つまり、ご法義を個人の専有物のように捉える傾向が強いのです。「個の救い」に終始する態度は、自分以外の人びとと人生を「共に」歩んでいくことを大切にする大乗の精神に全く反しています。

仏教の歴史は「翻訳の歴史」

（徳永）　私は京都女子大学で三三年間、仏教に縁のない学生に真宗のみ教えを説いてきました。

『本願寺白熱教室』（法蔵館）の中でも詳しく書きましたが、学生たちに真宗の専門用語など使えません。ご法義に馴染みの深いお同行相手なら、専門用語を使用することも可能でしょう。しかし、「仏」とも「法」とも知らない学生を相手に、そんな話は通じません。でも、専門用語など使わずとも伝わるのです。一般的な言葉でもって伝道することは十分に可能です。仏教の専門用語を現在の言葉に翻訳すればいいのです。そもそも、仏教の歴史とは「翻訳の歴史」です。翻訳によって仏法は世界に広がっていきました。

　専門用語によってご法義を一部の人間の専有物にすることは到底認められません。あらゆる人に開かれた、「公共性」のある立場で広くご法義を伝えるべきです。

純粋な利他性ではなく「凡夫の自覚」から

（前田）　私は一般家庭に生まれ、大学卒業後も企業勤めをしていましたが、一二年前に縁あって広島のお寺の坊守となりました。当初は真宗に対して外部の視点で接していましたが、最近ではすっかり真宗色に染まってしまいました（笑）。

　さて、「一緒性」は蓮如上人がおっしゃる「平座」や「御同朋」「御同行」の精神に通じるのであれば、「真宗らしさ」として大切にすべきでしょう。ただし、私たちはどこまでも、自分中心にしか物事を考えられない「凡夫」だということを忘れてはいけないと思います。「人のために」といって社会活動をしても、凡夫に「純粋な利他性」はありません。衆生を助け、救うのはどこまでいっても阿弥陀様です。その阿弥陀様のお救いを伝える「自信教人信」というのが僧侶の基本的なあり方だと考えます。阿弥陀

宗報17-05読物.qxp_宗報 2017/06/26 13:43 ページ 26

様のお慈悲をいただく身になれば、自然と他者への共感や思いやりの心が芽生えるのではないでしょうか。「大乗の至極」としての浄土真宗の精神の発揮は、「凡夫性の自覚」のうえに成立してくるものだと思います。「凡夫性」を自覚しない社会との関わりは、ときに危険をともなうことを忘れてはいけないと思うのです。

（釈） 宗門とご縁のない方々にどう共感してもらえるか、という視点がまさに「答申」の大きなポイントです。今一度、「仏教としての浄土真宗」という文脈を再点検する時期に来ていると思います。

近代以降、欧米思想の流入によって、「孤高の実存者」としての宗祖像が流行しましたが、前近代はむしろ「人びとと一緒に泣く御開山」としての宗祖像が根強かった。共に田植えをしたり、共に歌を歌ったりした親鸞聖人のイメージが強かったと想像します。

前田委員も言及されたように、何一つできないわが身の「凡夫性」を徹底的に自覚したときに、「じゃあ、何をするのか」という問いが起こってくるのだと思います。

私自身、様々な社会活動を行っていますが、教義に支えられている実感があります。「雑毒の善」のわが身を知らされるからこそ、「人のために生き、人と共に生きる」という「一緒性」の生き方が実践可能になると考えています。

（藤丸） 「一緒性」には、大乗の精神がこめられているとともに、「わかりやすさ」というポイントがあることが確認されたように思います。また、この言葉の意味を問う中で、「平座」「凡夫の自覚」といった真宗の言葉と相互作用が生まれ、豊かな意味が与えられていったよう

前田純代氏

一九七三年生まれ。東京大学文学部卒業。一九九七年より株式会社野村総合研究所コンサルタントとして勤務。その間フランスＨＥＣ経営大学院にてＭＢＡ修了。その後、中央仏教学院を経て安芸教区広陵西組・善法寺に入寺。現在、善法寺坊守。宗派では仏教こども新聞編集委員、企画諮問会議委員を務める。

【著作】

『親子で読めるほとけさまのお話』共著（本願寺出版、二〇一四年）

宗報17-05読物.qxp_宗報 2017/06/26 13:43 ページ 27

に思います。新しい言葉であることが対話の契機になり、豊かな意味を喚起する効果を生んでいるのでしょう。それでは、次のテーマに移りましょう。

テーマ②　信頼される僧侶・選ばれる寺院とは

（藤丸）「答申」では「お寺三六〇度診断Ⓡ」（八頁）について言及されています。これは、ご門徒をはじめとする寺院関係者へのアンケート調査によって、自分たちのお寺が潜在的に有している強みや課題を「見える化」させ、各寺院の将来計画に資するための分析手法です。

「受け手の立場の視点」（一九頁）とは、すなわち、人びとが自分のお寺をどう思っているのかを真摯に受け止めながら歩んでいこう、という方向性があらわれています。こうした背景には今後、寺院や僧侶がますます「選ばれる」時代になるという予測があります。「選ばれる」ためには当然「信頼」が不可欠です。そこで、「信頼される僧侶・選ばれる寺院」とは何かをテーマに、議論を進めたいと思います。前田委員は、シンクタンクで仕事をされた経験をお持ちですが、「信頼」は何によって醸成されていくものでしょうか。

選ばれるためには「独自性」が必要

（前田）「信頼される僧侶」と「選ばれる寺院」は、分けて考える必要があるでしょう。「信頼」は一人ひとりの基本的な動作と連動しています。「約束を守る」「問いにすぐ答える」「分け隔てしない」など、地道な日々の努力によって「信頼」は培われるものです。

これに対して、「選ばれる寺院」となるために必要なのは、「独自性」です。社会のニーズはとても多様化しています。

今、一般企業では多様な人材を確保しようとしています。それはマーケット状況が変化したときに、色んな人材がいることで対応を可能にし、生き残ることができるからです。

僧侶も画一的である必要はなく、「多様」で「個性的」であることがむしろ重要です。色々な人がいていい。法話と読経の他にも様々な布教伝道の方法があるはずです。それぞれの僧侶がそれぞれの個性を発揮することで、宗門が社会に貢献することが可能になると思います。

（藤丸）　得度習礼や教師教修など、宗門の人材養成機関では極めて短期間の中で僧侶の養成が行われています。こうした短い期間で宗門が提供できるものには限界もあると思います。時間的な制限がある中で、多様な人材を求めるにはどうすればいいのでしょうか。

宗報17-05読物.qxp_宗報 2017/06/26 13:43 ページ 28

主体的に考えるきっかけが多様な人材を確保する

（前田） 確かに、得度や教師で多様な僧侶養成を行うことは難しいでしょう。でも、そこで各自がそれぞれに「どんな布教がしたいのか」を考える機会を与えることで、自分の将来をイメージすることができるのではないでしょうか。「日曜学校」や「ボーイスカウト」など、どんな形でもいいでしょう。主体的に考えて行動するきっかけを提供することで、多様な人材確保に繋がると思われます。

現状の僧侶は、「読経」と「法話」にとらわれすぎている感が否めません。読経や法話が苦手なために、自信喪失している人も見受けられます。でも、それで自信を失わないで欲しい。それぞれの長所を伸ばしていければそれでいいと思うのです。

マクロな視点とミクロな視点を交えた寺院運営

（釈） すでに「信頼される僧侶」と「選ばれる寺院」という状況へと突入している地域は少なくありません。地縁・血縁で結びついていた地域はますます縮小します。もはや、全国各地で人びとのマインドが「都市化」しています。この場合の「都市化」とは、「消費者化」されているということです。都市部だけなく、地方においてもお寺を「選ぶ」状況が到来すると予想されます。

僧侶育成体系プロジェクト委員会では、葬祭業者に届く寺院へのクレームについても検討しました。葬祭業者には、寺院や僧侶に関する遺族からのクレームや批判が届きます。でもそれが寺院や僧侶へと伝わることは少ない。こうした面も含めて、「寺院運営論」「僧侶論」へと展開する議論を重ねました。そこでは、僧侶には「マクロな視点」と「ミクロな視点」が必要だという話になりました。マクロな視点とは、世代別人口の増減、社会・家族形態の変化など、大局的な視点で寺院のあり方を考察することです。それと同時に、各個別の寺院・僧侶の活動へと眼を向ける。ミクロな視点で見れば、とても魅力的なものがたくさんある。これからの住職は、マクロな視点で世の中を見渡す視点と、地域や住職特性などを見つめるミクロな視点を交えて寺院運営をするという双方の視点が重要だと思います。またそれは、現代社会と対話・提言できる僧侶を目指すことでもあるでしょう。

「人のために生き、人と共に生きる」僧侶の地道な活動が僧侶像を変える

（三田） 「一緒性」＝「人のために生き、人と共に生きる」という生き方は決して簡単なことではありません。京都には仏教各宗派、他宗教も含めて大勢の宗教者がおられますが、その宗教者に対して新

宗報17-05読物.qxp_宗報 2017/06/26 13:43 ページ 29

聞社に届く声の多くは厳しいものです。

しかし、東日本大震災を契機に、宗教者に対する風向きが少し変わってきているように感じます。それは震災後、宗教者が積極的に現場で活動をしたことが評価された結果であると考えています。新聞各社も、僧侶の被災地での取り組みや寺院の役割について報じてきました。「人のために生き、人と共に生きる」僧侶の姿が、一般の人たちの僧侶観を変えたのです。

大地震で被災し、今現在も、苦しんでおられる大勢の方々がおられることを忘れてはならない。自然災害は今後も必ずどこかで起こります。これを前提に、宗教者、僧侶のあり方も考えないといけないのではないでしょうか。寺院活動はもちろん、寺の外に出ていくような、宗門をあげた現場での地道な努力が、「信頼される僧侶」へと繋がっていくのだと思います。

（藤丸）「選ばれる」と「信頼される」という二つの問題についてご議論いただきました。

「選ばれる」ことについては二つの視点が出ました。一つは主体的に考える契機を作ることで独自性のある寺院活動が可能になるということ、もう一つは世の中の需要をマクロ・ミクロの視点で見るということの重要性です。そして、「信頼」については、三田委員から、現場に出て地道に活動することの重要性が指摘されました。今後、巨大な自然災害が起こることが予想されています。未来の危機に備えることも、「信頼」を醸成するための重要な要素であるように感じました。

三田真史氏

一九六四年生まれ。龍谷大学大学院文学研究科博士課程中退。一九九一年、京都新聞社入社。社会部、文化部などを経て現在、京都新聞社編集局文化部長・論説委員、京都教区天橋組・浄福寺住職。宗派では企画諮問会議委員を務める。

【著作】

二〇〇六年四月から本願寺派『宗報』にコラム「こころ通信――宗教都市・京都から」を連載している。

宗報17-05読物.qxp_宗報 2017/06/26 13:43 ページ 30

テーマ③ 法話力とは

（藤丸） では三つ目のテーマに移りましょう。宗門ではこれまで多くの布教使を養成し、「法話」による伝道に力を入れてきました。「答申」では、「門徒にかかわらず、今までお寺にご縁のなかった人を含む有縁の人全て」（一九頁）に伝わる「法話力」の必要性について提言されています。これは裏を返せば、現状の法話はお寺とご縁のない人びとには伝わりにくい、という分析があるのではないかと想像します。「公共性」の立場から、伝わる言葉を紡ぎ出すことの重要性を指摘される徳永委員から、ご意見をいただけますでしょうか。

法話力はテクニックであってはならない

（徳永） 「法話力」とはテクニック（技術）のことを言っているのでしょうか。

このように問われると、どうもテクニックをどのように教えればいいのかを問われているような気がしたのですが、そのようなことは全く必要ないというのが私の考えです。宗門としては、現代に即応した法義を僧侶の方々に学んでいただく機会を設けることしかできないと思います。テクニックなどは浄土真宗ではいっさい言ってはいけないし必要ない。

テクニックのことを考えるのではなく、御開山が伝えたかったことを伝えていくのが大切です。宗門としては、できるだけ多くの方に現代に即応した教学を学ぶ機会を設けることで、僧侶が個々人に法話力を磨いていくということを考えていけばいいと思います。

聴聞の仏道と教学の強い枠組みが本願寺派の特徴

（釈） たとえば節談説教は真宗独自のものですが、「節付け説教」という語りに節を付ける説法は、はるかいにしえから行われてきました。重要な文言を印象づけるために節が使われたりもします。

他派に比べて真宗は説教・法話に心血を注いできました。だから節談をはじめ、数多くのスタイルを生み出してきたわけです。そこにはやはり学ぶべきものがあると思います。ただ、節談は草の根的な創意工夫ですので、宗派が積極的に関与するようなものではないかもしれません。

とにかく、布教使の資格を特別コースで養成しているのは本願寺派だけでして、大きな特徴です。そのため、法話の内容に関しても、教学的枠組みが強い。これも特徴ですね。真宗以外の宗派はかなり各個人に任せている。縛りが緩い。

宗報17-05読物.qxp_宗報 2017/06/26 13:43 ページ 31

その真宗の中でも本願寺派は、統一的な言説を発信する傾向がある。

布教使養成の取り組みを総合的に考え直すべき

（釈） こうした強みがあるからこそ生まれてきた良い面もあれば、抱えている問題点もある。真宗の仏道の特性を踏まえたうえで、いかに法話に取り組んできたのか、このあたりから考え直すことは、恐らく僧侶養成の問題に直結しているのではないかというのが「法話力」のトピックにおける提案です。

念仏者がどう生きていくのかを伝えるのも法話である

（丘山） 法話のテクニックについては徳永委員のおっしゃるとおりだと思います。これは葬儀でも同じです。葬儀も心を込められるかが重要であって形式ではない。

法話は阿弥陀様にであった喜び・味わいをお伝えする。それは型にはまっていてもいなくてもどちらでもいい。ただし、それだけではダメな気がします。苦しみ、悩み、悲しんでいる人たちとどう関わり、共に生きていくのか。これを伝えることも法話だと考えています。今回、ご門主さまが「念仏者の生き方」（ご親教）を通してそのことをお示しくださいました。

法話の基礎は聖典

（徳永） これまで研究所が聖典編纂に力を入れてきました。聖典は僧侶が法話をする原動力であり基礎です。この活動は重要で、今後も力を抜くことなく続けて欲しい。聖典の提供は僧侶に学びの場を提供しており、こうした事業に宗門は力を入れるべきです。お聖教抜きにしてご法義は成り立たないと思いますね。

受け手に都合がよいだけではいけない

（満井） 「法話力」の問題も含めてですが、この答申の中で「受け手の側に」という視点が大事だということがあります。もちろん、み教えが受け手を離れてしまっては、伝道は成り立ちませんから、そのことが大事なのは理解できます。しかし、機会があって『沈黙』という映画を見ましたが、ロドリゴという宣教師が日本の信仰習慣では形あることを求めることに葛藤していた。彼ら宣教師にとって、形あるものを求めるというのは偶像崇拝と同質であることに葛藤するのですが、結局は形あるものを与えていたわけです。

われわれの立場に立って考えてみれば、釈委員がおっしゃったように「受け手」は消費者マインドですから、自分に都合がいいものを求めます。それにただ応じていくだけでなく、自己肯定の発想

宗報17-05読物.qxp_宗報 2017/06/26 13:43 ページ 32

の人たちに対してどのように自我を無我に切り替えていくのか、どう自力を他力に切り替えていくのか、このような視点をわれわれの側が強く持っていないといけないと感じました。

（藤丸）「法話力」については、研究所に課題が与えられました。一つは、徳永委員から聖典編纂の重要性が指摘されました。これは釈委員ご指摘の教学の枠組みにも結び付いています。また、法話についてはわかりやすさを求めれば良いのかという問題提起がありました。これも非常に重要な問題提起のように感じました。

本願寺派は、とにかく法話を大切にしてきました。それを全面的に改変するのではなく、釈先生がご指摘されたように、伝統と革新、これまでの布教使養成の歴史をきちんと評価しつつ、課題に取り組んでいく必要がありそうです。これも、研究所の仕事でしょうか……研究所の仕事が増えそうですが、重要な問題提起と感じました。

※以上、前半の三つのテーマについてお伝えしました。次号では、後半の三つのテーマについてご報告します。

（本願寺派総合研究所 教団総合研究室）

徳永一道氏

一九四一年生まれ。大阪外国語大学英語学科卒業。一九七二年、龍谷大学大学院文学研究科真宗学専攻博士課程単位取得満期退学。現在、勧学寮頭、京都女子大学名誉教授、大阪教区河中南組・正福寺住職。専門は真宗学。

【著作】

『英文真宗聖典シリーズ』（共訳、本願寺国際センター）

『真実信心の仏道』（Alfred Bloom, Essential Shinran: A Buddhist Path of True Entrusting の日本語訳監訳）（毎日新聞社、二〇一〇年）

「開かれた浄土真宗――教えを床の間に飾っておいてよいのか？」（『本願寺白熱教室』所収、法蔵館、二〇一五年）など